

-UNSTOPPABLE-

KKUNST ARZT では、2 年振り、4 度目となる
山下茜里の個展を開催します。
山下茜里は、蠟染技法を駆使し、眼球や皮膚を
剥がされたような「人」のモチーフを通して、
ヒトの本質を考察するアーティストです。
本展では、時間をテーマに
「過去」「現在」「未来」についての 3 種類の
新シリーズで構成予定です。

(KUNST ARZT 岡本光博)



-ULTRA PLINIAN- 2023 年個展展示風景

経歴

1997 年 大阪に生まれる
2021 年 京都精華大学芸術研究科博士前期課程修了

個展

2020 年 -BORDER- (KUNST ARZT/ 京都)
2020 年 -PANOPTICON- (gallery maronie/ 京都)
2021 年 -beyond the skin- (楽空間祇をん小西 / 京都)
2022 年 -NAKED- (KUNST ARZT/ 京都)
2023 年 -ULTRA PLINIAN- (KUNST ARZT/ 京都)
2023 年 -ASSEMBLE- (Galeria Punto KOBE/ 兵庫)
2024 年 Beyond the Skin (小山登美夫ギャラリー天王洲 / 東京)
2024 年 -Long for the Light- (楽空間祇をん小西 / 京都)
2024 年 Human being Human (Thomas VanDyke Gallery/NY)

主なグループ展

2018 年 創造的トローイング作家になるために (gallery fleur/ 京都)
2021 年 A-Lab Artist Gate 2021 (あまらぶアートラボ A-Lab/ 兵庫)
2021 年 VIGOR (gallery maronie/ 京都)
2022 年 Kyoto Art for Tomorrow2022- 京都府新鋭選抜展 - (京都文化博物館 / 京都)
2022 年 第二回京都の染色 - 世代をつなぐ女性作家たち - (ギャラリーヒルゲート / 京都)
2022 年 瀬戸内国際芸術祭 2022 (高見島 / 香川)
2023 年 Kyoto Art for Tomorrow2023- 京都府新鋭選抜展 - (京都文化博物館 / 京都)
2023 年 新鋭染色作家展「柳は緑 花は紅」(染・清流館 / 京都)
2023 年 RE START (picture gallery/Lithuania)
2023 年 Chemical Reactions 8 (space31/ 兵庫)
2023 年 木津川アート 2023 (木津川市 / 京都)
2024 年 ファイバーアート、サイコー (京都芸術大学ギャルリオーブ / 京都)
2024 年 ギャラリズム (ピアスギャラリー / 大阪)
2025 年 第 28 回岡本太郎現代芸術賞 (川崎市岡本太郎美術館 / 神奈川)

2025 年 6 月 6 日 (金) から 15 日 (日)

12:00 から 18:00 月曜日休み

会 場 : KUNST ARZT

605-0033 京都市東山区夷町 155-7 2F

問い合わせ



KUNST ARZT 代表 岡本光博

090-9697-3786

kunstarzt@gmail.com

展覧会コンセプト

止めることはできないー猛スピードで迫り来る未来は、一瞬の今を通り過ぎてすぐさま過去となる。過去の溜まり場には膨大な記憶が集まりつづけ、ときにはそれが思い出にもなる。すべては、どうあがいても一方通行の時のなか。我々はそこに存在したという痕跡を残しながら流れつづける。一度蒸発した水が、元の器に戻らないように、熱を宿したすべての存在は、生まれた瞬間から徐々にその秩序を失って、やがては目に見えぬほどに散り散りとなる。止めることはできないーなら、この逆えれない流れの受け入れ方を私は知りたい。

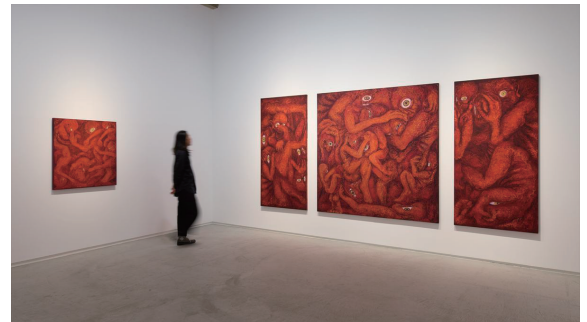
アーティスト・ステートメント

身体の前まで張り巡らされている無数の管
血液を通して様々なものが行き交うこの身体は、常に熱を帯びている。
真っ白な布の上に熱い蠟が走り、幾層にも重なり、やがて思い描く形に見えてくるその様は、およそ40週間の時間をかけ、何もなかった母体からみるみるうちに形作られていく人間のようだ。私は、重ねた熱の痕跡で「人」を作っている。「人」を作るのに適した方法がこれだと思っている。自分、そしてこれまでに会った人々、その誰しもが「ヒト」という単一の生き物だ。その明白な事実と、自分が「人間」であることへの執着、生き物としての「ヒト」への強い興味から、「人間」を表現し続けている。
かつて遭遇した、ヒト特有の「ことば」や「ふるまい」「おもい」を基に作品を制作している。そして、それを誰かに見られている光景をわたしが見つめ、そうした行為の流れの中にわたしの作品は存在している。また「目」はわたしが「人間」を表現する上で不可欠な要素だ。人の目は、他の生物にはない独特な眼差しと、その内にある個性を強く覗かせている。それは「目」が人体で唯一むき出しにされた透明の臓器だからかもしれない。自身の内と外を通ずる唯一の窓だからかもしれない。



Long for the Light
2024
全長約950cm
綿布・反応染料・わた・角材・針金
画像提供: 川崎市岡本太郎美術館
ー光を求める身体

生き物が光を求めた結果、それを感受できる器官を獲得した。光と影の存在から、大まかな色の違いを認識し、徐々に視界が鮮明になる。この大きな流れを1人の赤子の身体に準えた。生まれて初めて見る何かに向かって這いずり、壁伝いに歩みを進める。そこに現れる純粋さは「見てみたい」という人の本能と貪欲な好奇心を表しているのではないだろうか。おぼつかない柔らかな足で立ち上がり、届かないものに手を伸ばしている無垢で危うい姿が「光を求める身体」という言葉に託されている



Beyond the Skin 展示風景
2024
小山登美夫ギャラリー天王洲/東京
photo by Kenji Takahashi ©Akari Yamashita,
Courtesy of Tomio Koyama Gallery



Dancing People
2023
反応染料・わた・針金
photo by 作山朋之
つながり続けるへその緒に踊らされている。
互いに巻き込まれ、絡み合いながら、
彼らは今日も踊っている。